

アーツ・アンド・クラフツとデザイン

ウィリアム・モリスからフランク・ロイド・ライトまで

府中市美術館（都立府中の森公園内） 22.09.23～12.04

「アーツ・アンド・クラフツ」という言葉は、一言で言えば19世紀のイギリスの革新運動で、近代化、工業化の進むイギリスで、丁寧な手仕事による日常品で人々の暮らしを美しく彩ることを目指した「ウィリアム・モリス」がその理念を受け継いだもので、やがて世界各地に広がった運動である。

<展示品の見どころ>

1. 「モリス」の室内装飾の名作やブックデザインまで「全20点」。
2. 運動の発展に重要な役割を果たした装飾家、画家、建築家などの作品。
3. 元は東洋の美術品であった「リバティ・プリント」の品物。
4. 米国で独自の発展をとげた宝石商「ティファニー」や建築家「フランク・ロイド・ライト」が手掛けた作品。

ウィリアム・モリス(1834～1896) 《格子垣》 1864年 木版/色摺

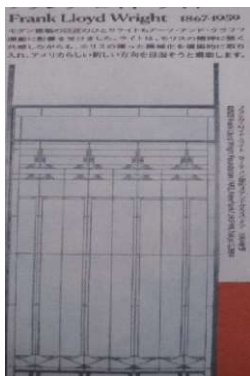


「モリス」は、詩人、作家、デザイナー、実業家、美術館など実に多彩な経歴を持つが、本作品は「モダンデザインの父」や「モダン・ファンタジーの父」と呼ばれる「モリス」が新婚時代に暮らしたレッド・ハウスのバラの垣根をヒントにした作品で、バラの花に集う鳥や虫までが生き生きと描かれている。

部屋に居ながらにして庭の雰囲気をも十分に味わうためのアイデアであるとされている。

フランク・ロイド・ライト (1867～1959)

《マーティン邸のステンド・グラス・ドア》 1904年



「ライト」は、モダン建築の巨匠の一人で「近代建築の三大巨匠」とされ、プレイリースタイル(草原様式)作品や2022年は開業100周年を迎える「帝国ホテル・ライト館」の設計に関与した名高い建築家である。

「ライト」も「アーツ・アンド・クラフツ」運動に影響を受けて、「モリス」の運動に強く共感しながらも、「モリス」の嫌った機会化を積極的に取り入れ、アメリカらしい新しい方向を目指そうと模索した。